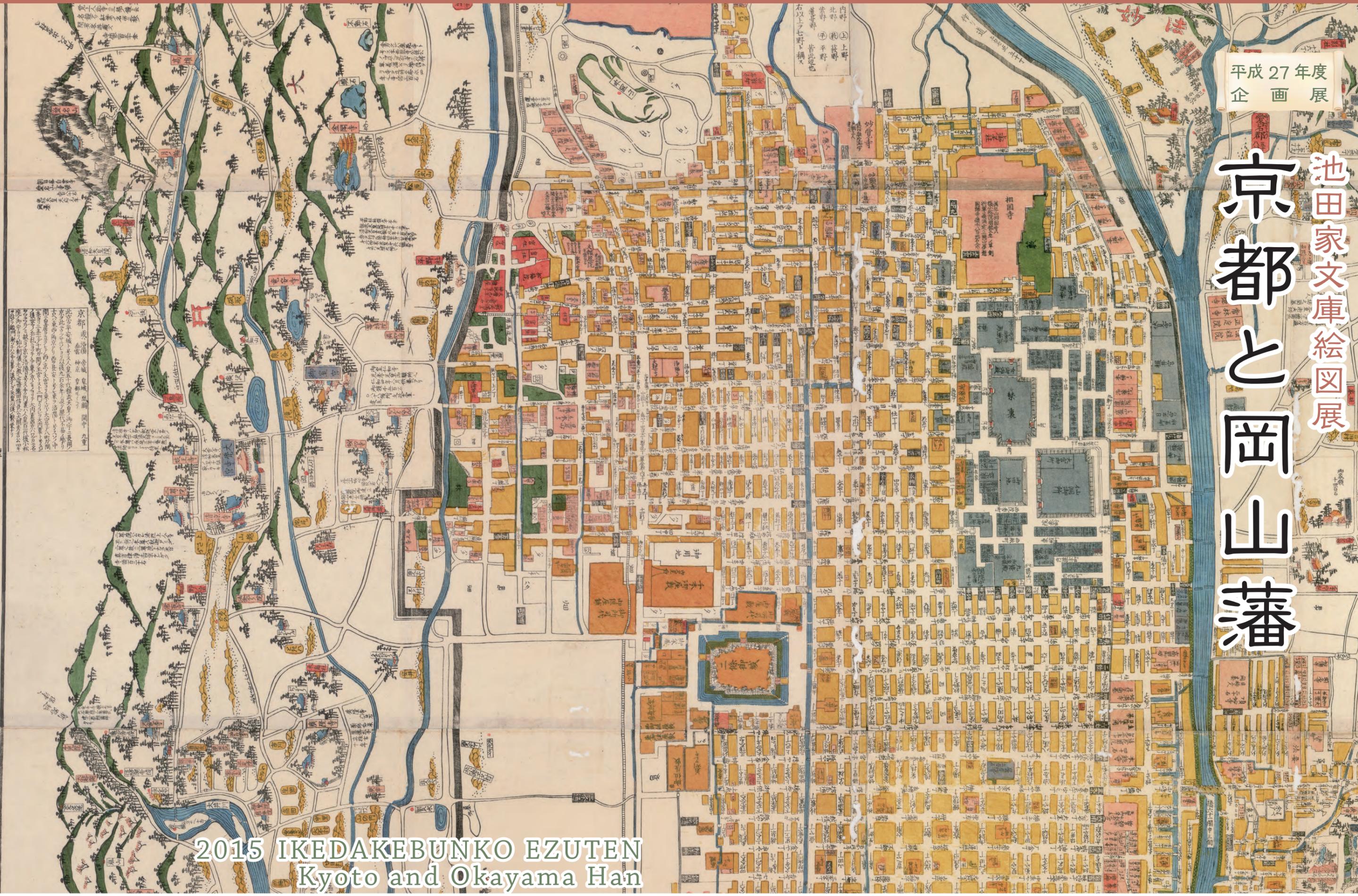


平成 27 年度
企画展

京都と岡山藩

池田家文庫絵図展



2015 IKEDAKEBUNKO EZUTEN
Kyoto and Okayama Han



平成27年度 池田家文庫絵図展「京都と岡山藩」図録 正誤表

頁	箇所	誤	正
関連行事	講演会「近世京都の大名屋敷」 日時	平成27年11月1日(土) 午後2時～午後4時	平成27年10月31日(土) 午後2時～午後4時
12	番号13 解説文4行目	桐箱	杉箱
13	番号17 年代	[享保20年(1735)]	[宝永6年(1709)力]
13	番号17 解説文	(※下記に差替え)	
23	番号17 年代	[享保20年(1735)]	[宝永6年(1709)力]

※頁13 番号17 解説文

池田綱政が宝永6年(1709)の中御門天皇の即位にあたって献上した太刀などの目録と考えられる。その次の代である桜町天皇が享保20年(1735)に即位する際に目録作成の参考とされ、そのままこの包紙に入れられていたのだろう。

京都と岡山藩

Kyoto and Okayama Han

平成二十七年
度
企
画
展

池田家文庫絵図展

- 会 期 平成 27 年 10 月 24 日(土)～ 11 月 8 日(日)
- 会 場 岡山シティミュージアム 5 階 展示室
- 主 催 岡山大学附属図書館・岡山シティミュージアム
- 後 援 岡山県教育委員会・岡山市教育委員会

岡山大学附属図書館と岡山シティミュージアムは、共同で企画展池田家文庫絵図展「京都と岡山藩」を開催します。池田家文庫絵図展は岡山大学と岡山市の文化事業協力協定に基づく事業であり、本年で11回目の開催となります。

本展覧会は、岡山大学附属図書館の所蔵する江戸時代の備前岡山藩池田家の藩政資料である池田家文庫を、広く地域社会の皆様に公開し、親しんでいただくことを目的に企画しています。中でも池田家文庫の特徴のひとつである地図資料「絵図」を中心に展示しています。

近年の展覧会では、絵図の中から比較的時代の新しい江戸時代後期から明治初期の頃までをとりあげ、歴史の流れに沿って様々な資料をご覧頂いてきました。本年は、「京都と岡山藩」をテーマに、京都屋敷、京都留守居を中心に、岡山藩と朝廷、公家の関係を京都の町絵図や京都屋敷、伏見屋敷の絵図、蹴鞠に関する約40点の資料からご紹介します。

この池田家文庫絵図展で皆様が、岡山ひいては日本の歴史に興味や関心を抱き、池田家文庫を地域の共有の財産であると感じていただければ、主催者として存外の喜びと存じます。

平成27年10月24日

岡山大学附属図書館
館長 沖 陽子

岡山シティミュージアム
館長 行正 彰夫

関連行事

Event

オープニングトーク

日 時 平成 27 年 10 月 24 日(土) 午前 10 時～午前 10 時 30 分
場 所 岡山シティミュージアム 5 階展示室
講 師 岡山大学 特命教授 倉地克直氏

講演会「近世京都の大名屋敷」

日 時 平成 27 年 11 月 1 日(土) 午後 2 時～午後 4 時
場 所 岡山シティミュージアム 4 階講義室
講 師 京都大学大学院文学研究科 教授 横田冬彦氏

凡例

Introductory

- 1 本図録は、岡山大学附属図書館と岡山シティミュージアムが平成 27 年 10 月 24 日(土)～11 月 8 日(日)まで開催する『企画展 池田家文庫絵図展「京都と岡山藩」』の図録である。
- 2 展示番号と本書の図版番号、展示資料目録に記した番号は一致する。また表記は図版番号、資料名、頁数、年代、池田家文庫整理番号、法量（タテ×ヨコ、cm）、備考の順に記した。
- 3 本書に掲載した展示資料の写真は、岡山大学附属図書館が所蔵する絵図デジタル画像及び岡山シティミュージアムが撮影した画像である。
- 4 本書の総説・展示資料解説は、岡山大学特命教授 倉地克直が執筆した。編集は岡山大学附属図書館と岡山シティミュージアムで行った。

目次

Contents

「京都と岡山藩」解説	1
出展資料解説	6
出展資料目録	23
池田家文庫絵図展・記念講演会開催記録	24

徳川幕府の確立と京都

京都は、延暦13年(794)に都が開かれて以来、長く政治・経済・文化の中心であった。しかし、戦国時代になると朝廷や室町幕府の力が衰え、戦乱の影響もあって京都の町自体も衰微した。天下統一をめざした織田信長・豊臣秀吉は、朝廷・寺社勢力の拠点である京都の復興に努め、そのあとをうけた徳川家康も自らの支配の拠点は江戸に置きながらも、京都への配慮を欠くことはできなかった。

関ヶ原の戦いが終わった慶長5年(1600)から大坂の陣が終わる慶長20年(1615)までの間に、家康は7回の上洛を行っている。当時は大坂に豊臣秀頼が居て、一定の影響力を保持していたこともあり、さまざまな政治的措置を京都で直接行う必要があった。そのために二条城が整備され、京都所司代が任命された。

元和2年(1616)家康が亡くなったのちも、徳川秀忠は元和3年、元和5年、元和9年、寛永3年(1626)と上洛を繰り返した。この間、元和6年には娘の和子まさこが後水尾天皇に嫁し(後の東福門院)、同9年には家光が征夷大將軍に就任する。家光も、元和9年・寛永3年に上洛している。

將軍上洛時には、政治的なイベントが催されることが多く、それにあわせて各地の大名も上洛し、將軍のもとに伺候した。鳥取藩主時代の池田光政は、元和5年には秀忠を二条城にたずね、城下町拡充について指示を受けた。元和9年には、家光の参内に随行し、家光から偏諱を賜るとともに、従四位下侍従じゅうしげじじゅうに任じられている。寛永3年には後水尾天皇の二条城行幸に参列、左近衛権少將さこのえごんのしょうしょうに任じられた。

寛永11年(1634)、家光は30万の軍勢を引き連れて最後の上洛を行う。もちろん池田光政もこれに供奉した。光政はこれより先の寛永9年に岡山に転封になっていた。寛永10年代に徳川幕府権力は確固としたものとなる。これ以降、文久3年(1863)に家茂が上洛するまで230年間、將軍が上洛することはなくなった。

岡山藩による禁裏普請

寛文13年(1673)5月9日、京都で大火が発生、内裏をはじめ多くの御殿が焼失した。これらの建物は万治4年(1661)正月19日の京都大火によって焼失したのち、寛文4年に再建されたばかりであった。翌延宝2年(1674)2月、幕府は岡山藩池田家に禁裏造営を命じた。池田家では寛文12年に光政が隠居し、綱政が跡を継いだ直後であった。綱政は早速家老の池田大学を惣奉行に任命し、準備に取りかかった。元締は上坂外記げき・水野三郎兵衛じんずしよ・神図書で、いずれも同年11月から京都に入った。

延宝3年正月19日「木作始きづくりはじめ」(手斧始ちゆうなはじめ)の儀があり、これにあわせて綱政も上京した。その後普請は順調に進み、11月には完成の運びとなった。綱政は再び上京、同月27日に天皇が新内裏せんこうに遷幸した。こうした際には綱政から祝儀を献上しており、それに対して天皇・中宮・院などから賜り物があった。

「京都日帳」(資料12)によれば、この1年間に禁裏造営のために出役した諸役人は534人、足軽・小人などは662人にのぼった。惣材木数28万6918本余、鳶とび日用人のべ46万4009人余、

この賃銀 693 貫 838 匁余、などと記されているが、費用の総額は分からない。

その後岡山藩は、明和 7 年（1770）に仙洞御所修復、文化 14 年（1817）には中宮御殿造営・仙洞御所修復を幕府から命じられ、それぞれ勤めている。

官位叙任について

政治の実権が徳川幕府に移った江戸時代には、天皇・朝廷・公家は「禁中并公家諸法度」などによって、その活動が幕府から規制される存在であった。そうしたなかでも、律令制の官位を授与することは、天皇に残された数少ない機能の一つであった。ただし、この機能も先の法度に「武家の官位は公家当官の外たるべきこと」とされたように、武家官位の決定権は將軍のもとにあった。

それでも最終的に官位を授与する位記や口宣は朝廷から出されたから、各大名家ではその取得をスムーズにするために、朝廷との関係を良好に維持しておく必要があった。

岡山藩池田家の当主の官位は「従四位下侍従」が一般的で、極官は「少将」であった。そのため歴代藩主は他の大名との釣り合いもあって、「少将成」を目標として、幕府はもとより朝廷・公家にもさまざまな働きかけを行った。その結果、藩主期間の短かった宗政を除くすべての当主が少将になっている。

また、即位・出産・法事など朝廷の慶弔事に各大名家はこぞって献上を行っており、池田家でもそれを欠くことはなかった。こうした日常的な交際も、官位昇進などに資するものであったろう。

公家による芸能免許

公家の所領も將軍からの朱印状によって宛行われたもので、しかも大名家の中下級家臣並みのわずかなものであった。ただし、公家のなかでも伝統的な芸能の「家元」としてその伝授を独占した公家は、それを通じて一定の収入を得るとともに、大名家などと恒常的な交際を持つことができた。他方武家にとっても、伝統芸能を修練することは文化的な箔付けになり、他家との交遊にも役立つものであった。

例えば蹴鞠の伝授は、江戸時代は飛鳥井家あすかいけが家職として独占した。池田家の歴代当主も飛鳥井家に入門し、同家から免許状を伝授されている。

一条家と池田家

戦乱のなかから支配者に連なることになった大名家にとって、有力公家と姻戚関係を結ぶことは、家系を格上げする手段であった。他方、経済的に困窮する公家からすれば、武家と婚姻を結ぶことでその財政的な援助が期待された。池田家では五撰家の一つである一条家と、江戸時代を通じて深いつながりを持ち続けた。

池田家と一条家とのつながりは、慶安 2 年（1649）に光政の次女の輝子が一条伊実これざね（のちのりながのりすけ 教良・教輔）に嫁いだことに始まる。この婚姻は將軍家光と光政の正室勝子（円盛院）の母である天樹院（家光の姉）が決めたもので、輝子は家光の養女となって一条家に嫁した。婚礼後から光政は参勤のたびに京都を訪れ、輝子の相談に乗っている。万治 2 年（1659）教輔は病気を理由に家督を輝子との子である内房ふゆつね（のち冬経・兼輝）に譲った。冬経は天和 2 年（1682）

に関白に就任、これにともなって輝子は従三位に叙せられ、政所まんどころと称することになった。その後一条家は兼香が継ぐが、兼香の正室には輝子が弟綱政の四男軌隆の娘智子（綱政養女）を自分の猶子として嫁がせている。輝子は享保2年（1717）4月に82歳で亡くなった。

輝子死後も一条家と池田家の関係は続く。兼香の子である道香には、池田継政の養女静子が嫁ぐ。また、池田斉政の嫡男であった斉輝の室には一条忠良の女知子（母は侍妾）が嫁いでいる。ただし、斉輝は23歳で亡くなったため、斉政の跡は養子の斉敏が継いだ。その後も一条家と池田家のつながりは強く、幕末の政局で左大臣として活躍する一条忠香を通じて岡山藩も国事に関わることになる。

留守居と大名屋敷

朝廷や公家との連絡調整などを行うために、各大名家は京都屋敷を構えた。岡山藩池田家では、元禄14年（1701）には猪熊通中立売上ル町に新屋敷を建設しているが、いつからかは定かではないが、以前からこの地に京屋敷を構えていたと思われる、その後も幕末までここに京屋敷が置かれた。二条城と禁裏との中間にあたり、公武の折衝に便利な地であった。近くに一条家の別宅（買得屋敷）もあった。

京屋敷には京都留守居が常駐し、所司代や朝廷・公家との折衝をはじめ、京銀（豪商からの借入）の調達や呉服など高級調度品の購入などの諸用を勤めた。「諸職交代」（資料31）によれば、京都留守居の初任者は延宝4年（1676）の若林弥三郎で、前職は呉服奉行であった。京都の事情に詳しい者と思われる。また、情報交換のために有力藩の留守居たちは組合を結び、活動していた。ただし、留守居自身が朝廷・公家や武家への正式の使者となることはなく、国元から送られる使者の京都での世話や案内をするのが職務であった。京都留守居になったものは、平士格の下級家臣で、後期になると伏見在番から転じるのが慣例のようにになっている。

岡山と江戸との往復や連絡は、伏見を中継して行われるのが一般的であった。そのため岡山藩では伏見にも藩屋敷を置き、伏見在番を常駐させた。国元や江戸から京都への連絡も、伏見を経由して行われた。ただし、伏見は京都に比べて屋敷も小規模で、在番の格もやや低かった。前期には大坂定目付から転じるケースが目立つ。

このほか大坂にも留守居が置かれており、京都・伏見・大坂の役人たちは、常に情報を交換し合いながら助け合って職務を行っていた。臨時に両役を兼ねる場合もあった。特に江戸時代後期になると、江戸藩邸からは「三上方」として一体のように扱われた。

刊行京都図

京都には多くの有名な神社・仏閣がひしめいていたから、全国から見物で訪れる人びとも少なくなかった。刊行図はこうした旅行者の便宜をはかるものでもあったから、江戸時代の初めからさまざまな絵図が刊行されたと思われる。実際どれだけの京都図が刊行されたか定かではないが、池田家文庫には5種類が残されている。

このうち最も古いものは天和2年（1682）3月改板の「新板平安城并洛外之図」（資料5）で、墨刷に手彩色が施されている。5種類のうち3種が「京寺町通二条上ル町御絵図所林氏吉永」の刊行したものであることも注目される。「林吉永」は京都図の専門書肆しよしであったと思われる。また「一条政所」（輝子）から送られた一枚物瓦版の京都図（資料6）は、宝永5年（1708）3

月に起きた京都大火の類焼範囲を知らせるもので、もともと災害報道を目的にしたと思われる即席簡略な内容のものである。

はじめは墨一色刷であった刊行図も、江戸時代も幕末になるにしたがって多色刷のものが現れるようになる。天保2年（1831）7月に刊行された「改正京町絵図細見大成」（資料7）などはその早い事例だと思われる。

京都図に共通する特徴としては、①中心に内裏と二条城が大きく示されること、②東西・南北の通りの名前が一本一本記されること、③公家屋敷・武家屋敷や大名屋敷に人名まで記されること、④寺社の名前が細かく記されること、⑤京都中心部とともに宇治や淀までを描くこと、などがあげられるだろう。

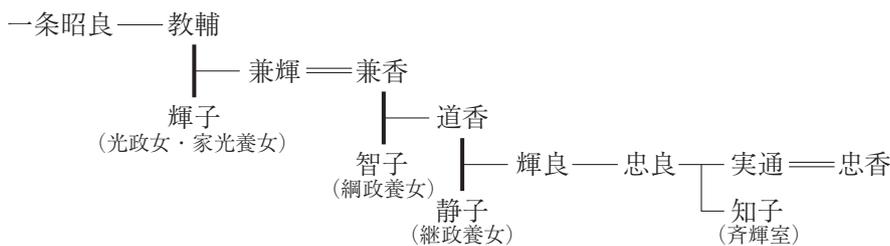
禁裏御所周辺の公家衆の屋敷を細かく記した「内裏図」（資料8）も刊行されている。これは観光というよりは、御用で公家衆などを訪ねる人の便宜をはかるものだろう。

岡山大学 特命教授 倉地克直

〔参考文献〕

久保貴子「江戸時代における公武婚姻」『岡山地方史研究』68号、1992年
次田元文「岡山藩の留守居について」『岡山地方史研究』64号、1990年

〔一条家略系図〕 ≡ は養子関係、| は夫婦関係を示す



〔池田家略系図〕 ≡ は養子関係

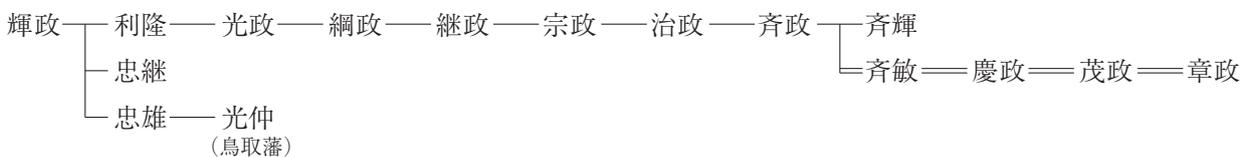


表1 岡山藩京都留守居一覽

氏名	在任期間	禄高	前役	跡役
若林弥三郎	延宝4年(1676)8月～天和3年(1683)8月	150石	呉服奉行	
上島彦次郎	天和3年(1683)8月～貞享2年(1685)11月	200石	小姓組	大坂留守居
尾上忠左衛門	貞享2年(1685)12月～貞享4年(1687)	無足		
志水治右衛門	貞享4年(1687)8月～元禄2年(1689)8月	150石		
笹岡平七郎	元禄2年(1689)8月～元禄8年(1695)12月	150石		
虫明伝之丞	元禄6年(1693)10月～元禄7年(1694)3月	150石		
蟹江善介	元禄8年(1695)8月～享保2年(1717)7月	150石		
下濃七介	享保2年(1717)7月～享保3年(1718)11月	150石	牛窓在番	
稲川市右衛門	享保3年(1718)11月～享保15年(1730)7月	150石	武具奉行	
石川清介	享保15年(1730)7月～享保16年(1731)9月	200石		
水野七郎左衛門	享保16年(1731)9月～元文4年(1739)9月	150石		公儀使見習
岩井善内	元文4年(1739)10月～寛延1年(1748)5月	200石	伏見在番	政所様附
	宝暦5年(1755)5月～宝暦7年(1757)10月、帰役	230石	政所様附	
河崎九一郎	寛延1年(1748)9月～寛延3年(1750)5月	150石	牛窓在番	徒頭
清水甚介	寛延3年(1750)5月～宝暦5年(1755)5月	150石		
岩井全之丞	宝暦7年(1757)10月～安永9年(1780)11月	230石	小姓組	
岩井源次郎	安永9年(1780)11月～寛政4年(1792)10月	250石	小姓組	
寺崎源右衛門	寛政5年(1793)2月～寛政6年(1794)10月	200石	伏見在番	
寺崎三之丞	寛政6年(1794)10月～寛政8年(1796)11月	200石		
小森浅右衛門	寛政8年(1796)12月～寛政13年(1801)2月	150石	武具奉行	
蟹江三郎右衛門	享和1年(1801)3月～文化3年(1806)2月	180石	伏見在番	
多賀文七郎	文化3年(1806)2月～文化10年(1813)11月	160石	伏見在番	
上泉侯平	文化10年(1813)11月～文政2年(1819)12月	160石	伏見在番	
小森槌之介	文政3年(1820)2月～文政7年(1824)9月	160石	伏見在番	
中野猪平太	文政7年(1824)11月～天保14年(1843)9月	130石	伏見在番	
大杉平之丞	天保14年(1843)9月～弘化2年(1845)5月	150石	伏見在番	城代浮組
岡崎猪大夫	弘化2年(1845)7月～嘉永6年(1853)3月	100石	中奥	
大西定次郎	嘉永6年(1853)6月～文久3年(1863)8月	140石	伏見在番	
沢井宇右衛門	文久3年(1863)2月～慶応1年(1865)5月	130石	伏見在番	組外格

表2 岡山藩伏見在番一覽

氏名	在任期間	禄高	前役	跡役
梶田喜八郎	延宝1年(1673)7月～元禄3年(1690)3月	無足		
虫明伝之丞	元禄3年(1690)3月～元禄6年(1693)10月	無足		
井上三平	元禄6年(1693)10月～元禄10年(1697)8月	無足		
	元禄14年(1701)7月～享保3年(1718)3月、再任	150石	大坂定目付	
久山長介	元禄10年(1697)8月～元禄14年(1701)7月	無足	大坂定目付	
羽原文内	享保3年(1718)3月～享保16年(1731)8月	150石	大坂定目付	
岩井善内	享保16年(1731)8月～元文4年(1739)10月	150石	大坂定目付	京都留守居
寺崎多兵衛	元文4年(1739)10月～宝暦1年(1751)11月	150石		
佐藤清内	宝暦1年(1751)11月～宝暦9年(1759)2月	100石		
寺崎源右衛門	宝暦9年(1759)4月～寛政5年(1793)2月	130石	大組	京都留守居
谷千右衛門	寛政5年(1793)5月～寛政10年(1798)1月	130石	大組	大組
蟹江三郎右衛門	寛政10年(1798)1月～享和1年(1801)3月	150石	大組	京都留守居
多賀文七郎	享和1年(1801)3月～文化3年(1806)2月	130石	大組	京都留守居
林吉之丞	文化3年(1806)2月～文化3年(1806)3月	160石	城代中小姓	
上泉侯平	文化3年(1806)3月～文化10年(1813)閏11月	130石	大組	京都留守居
小森槌之介	文化10年(1813)閏11月～文政3年(1820)2月	130石	大組	京都留守居
中野猪平太	文政3年(1820)2月～文政7年(1824)11月	90石	大組	京都留守居
光岡省吾	文政7年(1824)12月～文政8年(1825)3月	120石	大坂定目付	
石津才右衛門	文政8年(1825)5月～天保11年(1840)2月	150石	大組	
大杉平之丞	天保11年(1840)2月～天保14年(1843)9月	150石	大組	京都留守居
大西定次郎	天保14年(1843)11月～嘉永6年(1853)6月	140石	大組	京都留守居
塙儀左衛門	嘉永6年(1853)6月～安政2年(1855)9月	180石	大組	
沢井宇右衛門	安政2年(1855)11月～文久3年(1863)2月	100石	大組	京都留守居

1 やましろのくにえず
山城国絵図

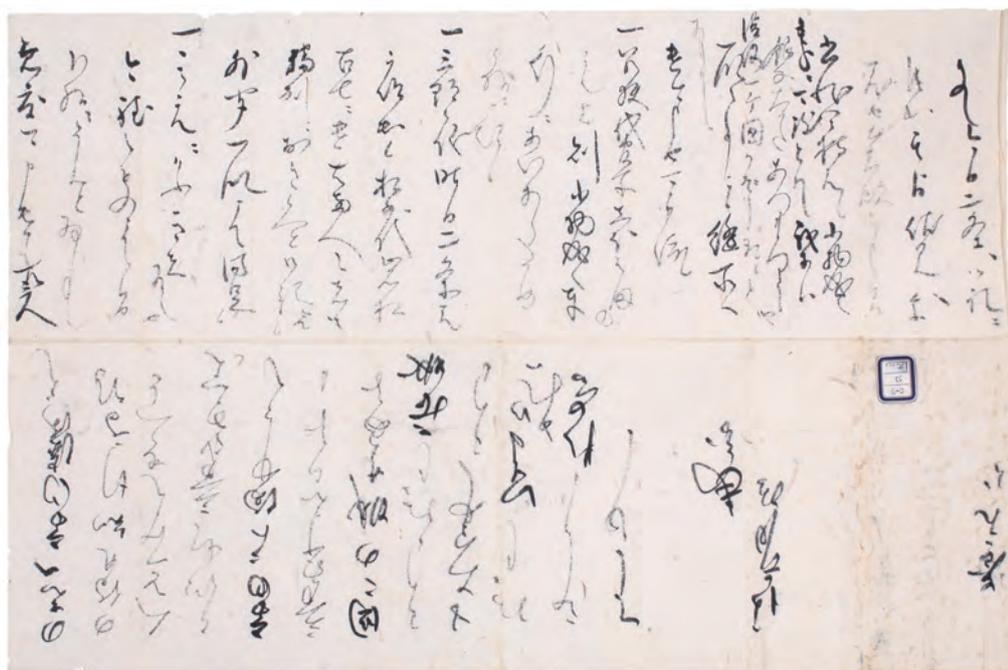
1 鋪 年代未詳
T1-80 164.5 × 116.8

寛永10年(1633)の幕府巡見使国絵図にもとづく「日本六十余州図」のうちの1枚。諸国を数え上げるとき、「山城国」を最初にあげるのが律令制の国郡制以来の慣行。朱丸に「禁中」と記し、居城は「二条」と「淀」。淀には「六万石 石川主殿頭」と記した貼紙がある。村名以外では、「伏見町」「伏見古城」が目立つ。



2 よこいようげんあていけだとしかしょうじょう
横井養玄宛池田利隆書状

1 通 [慶長20年(1615)] 閏6月9日
C9-31 36.0 × 54.0

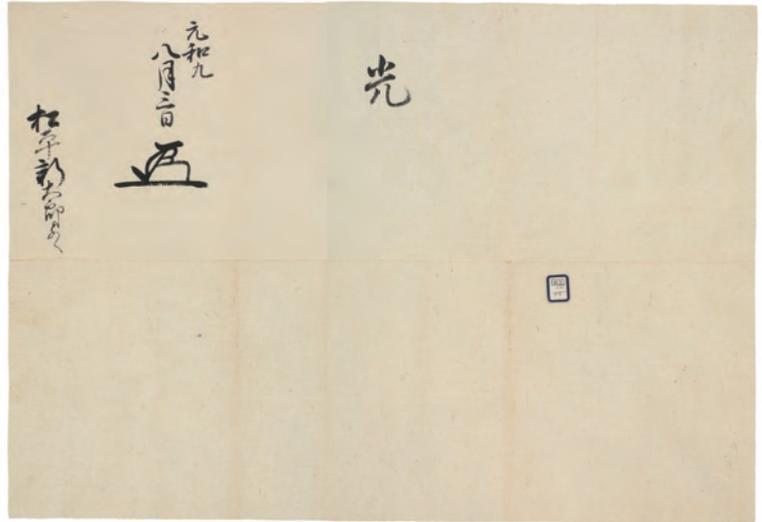


姫路城主池田利隆が、大坂の陣直後に、京都での状況を国元に居る側役の横井養玄に知らせた書状。利隆は京都二条城に伺候し、同年2月に亡くなった弟忠継の遺領配分などについて大御所徳川家康の決定を告げられた。その後利隆は、伏見城に居る将軍徳川秀忠にも挨拶するよう家康から指示されている。

3 いけだみつまさあてとくがわいえみついちじかきだしじょう
池田光政宛徳川家光一字書出状

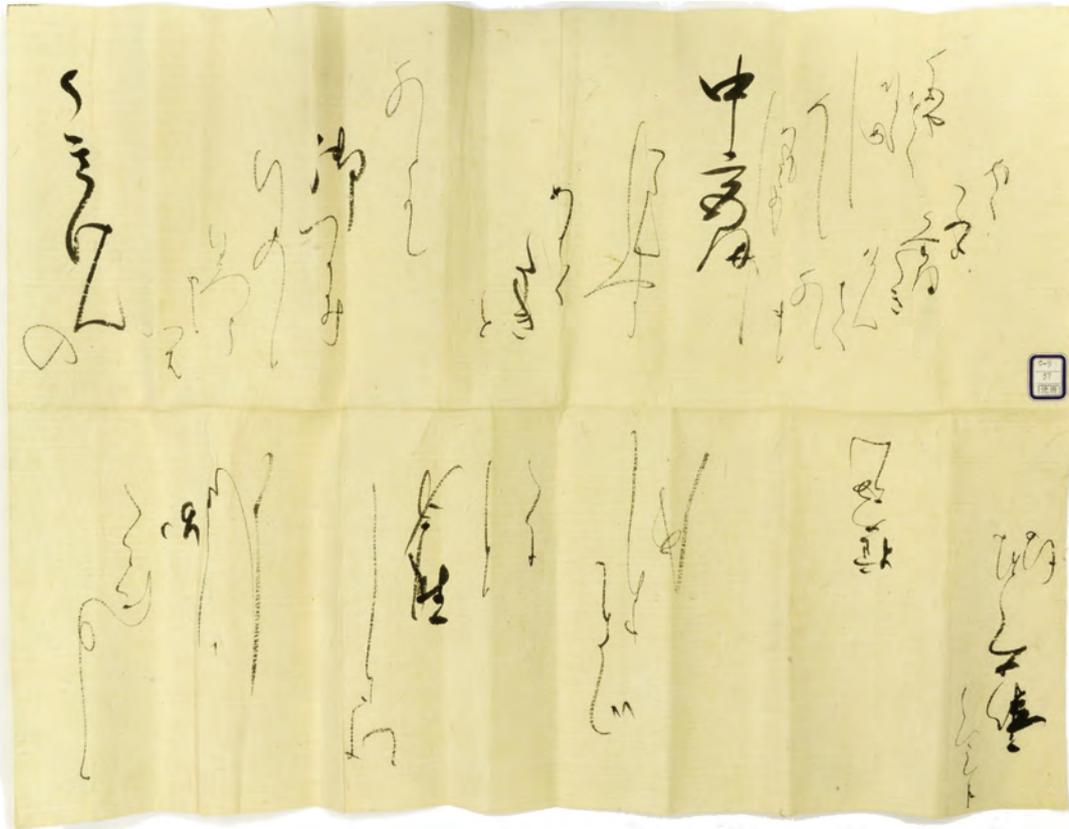
1通 元和9年(1623)8月3日
C6-317 46.3 × 66.6 包紙入

徳川家光が「光」の字を偏諱として池田光政に与えた書類。この年、家光は征夷大將軍に襲職するため上洛する。それより先に京都に上っていた光政は、家光から偏諱を賜って、幸隆を光政と改めた。次いで8月6日には家光の参内に供奉し、従四位下侍従に任じられている。池田家文庫では、光政から慶政までの11人に將軍から与えられた「一字書出状」が、「御拝領御一字」と上書きされた桐箱に収められている。



4 いけだみつまさあてごんだいなごんのつぼねしよじょう
池田光政宛権大納言局書状

1通 年代未詳
C9-37 43.1 × 58.8 包紙入

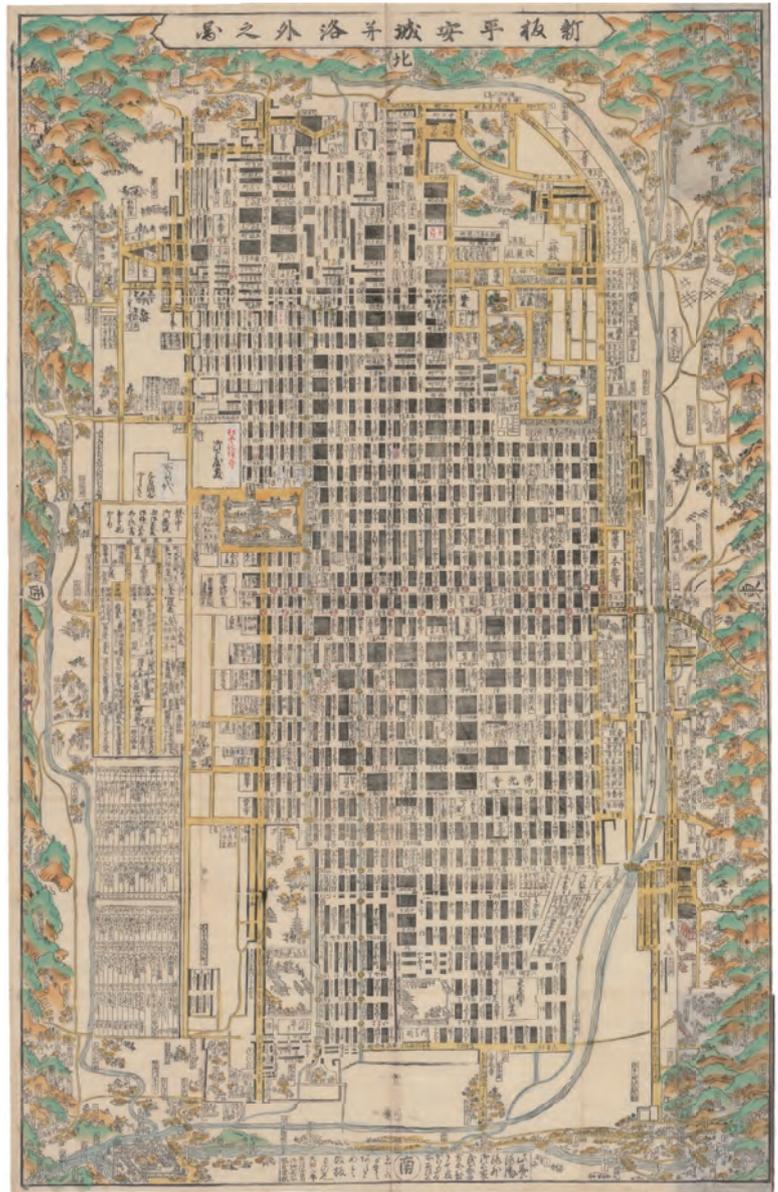


文中の「中宮」は、後水尾天皇の中宮である東福門院和子（徳川秀忠の娘）を指すと思われる。和子が興子内親王（のちの明正天皇）を出産し中宮に冊立されたのは、元和9年（1623）11月のこと。その後6人の子女が生まれている。この書状がそのいずれの時のものか定かでないが、光政が皇子女の誕生を祝う使いを送ったことに対する礼状である。「御ふたかたさま」（天皇と中宮）の意を権大納言局が奉じている。

5

しんばんへいあんじょうならびにらくがいのず
新板平安城并洛外之図

1 鋪 天和2年(1682)3月
T9-127 93.2 × 59.4 墨刷手彩色



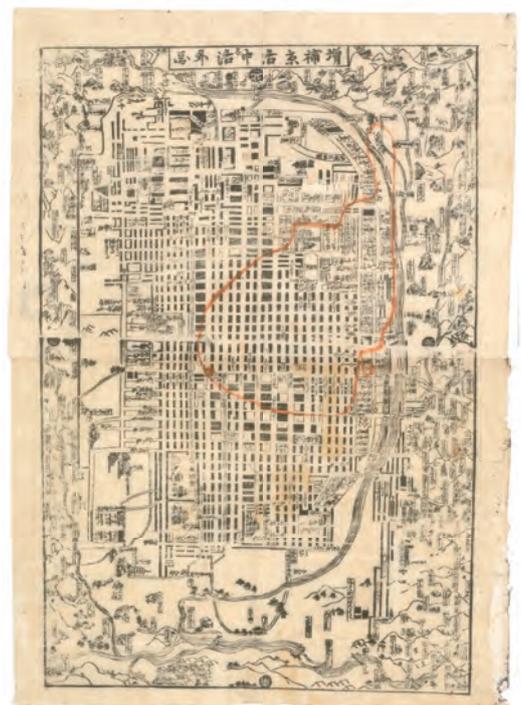
江戸時代でも比較的早い時期の刊行京都図。「御絵図所林氏吉永」が改板したものの。「一条政所」「政所下やしき」「政所」「御屋敷」(岡山藩京屋敷)などの貼紙とともに、所司代下屋敷には「松平紀伊守」という貼紙がある。松平紀伊守信庸の在任期間は、元禄15年(1702)から正徳4年(1714)までだから、その頃岡山藩で利用されたものか。

6

まんどころさま きた きょうのず
政所様ヨリ来ル京之図

1 枚 宝永6年(1709)11月24日
T9-120-2 47.6 × 33.2 墨刷・朱線

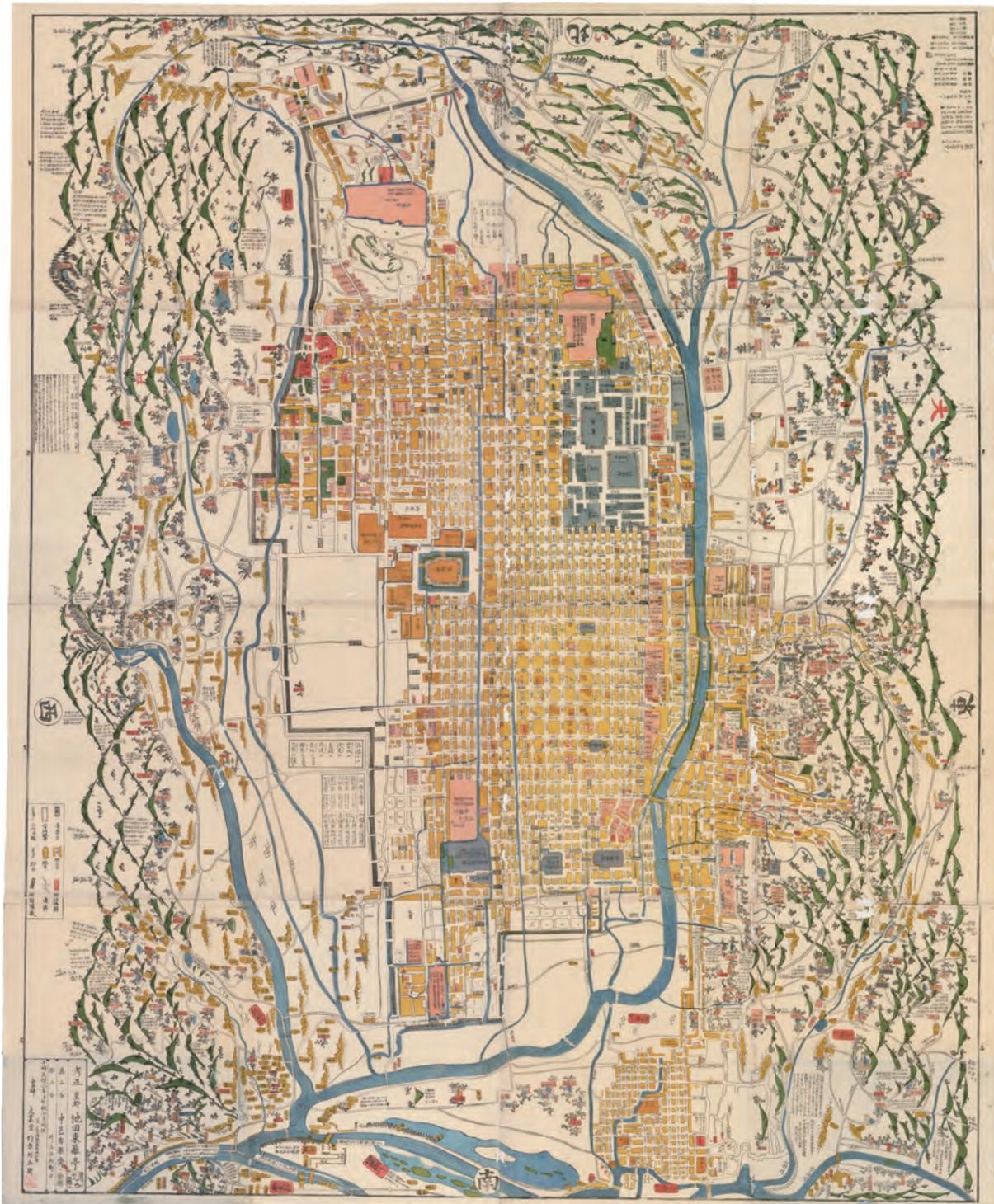
外包紙に「京之絵図一包并火事図一包」とあるうちの1枚。墨刷の「増補京洛中洛外図」に朱線で宝永5年3月8日の京都大火による焼失地域が示されている。朱丸は火元(油小路通り姉小路下ル町)。内包紙に「政所様ヨリ来ル/京之図/宝永六年丑十一月廿四日御渡被遊」とあり、一条政所(輝子)から池田家送到了ものと分かる。外包紙には「故御数寄方」と記した貼紙がある。



かいせいきょうまちえざさいけんたいせい
7 改正京町絵図細見大成

1 鋪 天保2年(1831)7月
T9-128 178.7 × 146.3 多色刷

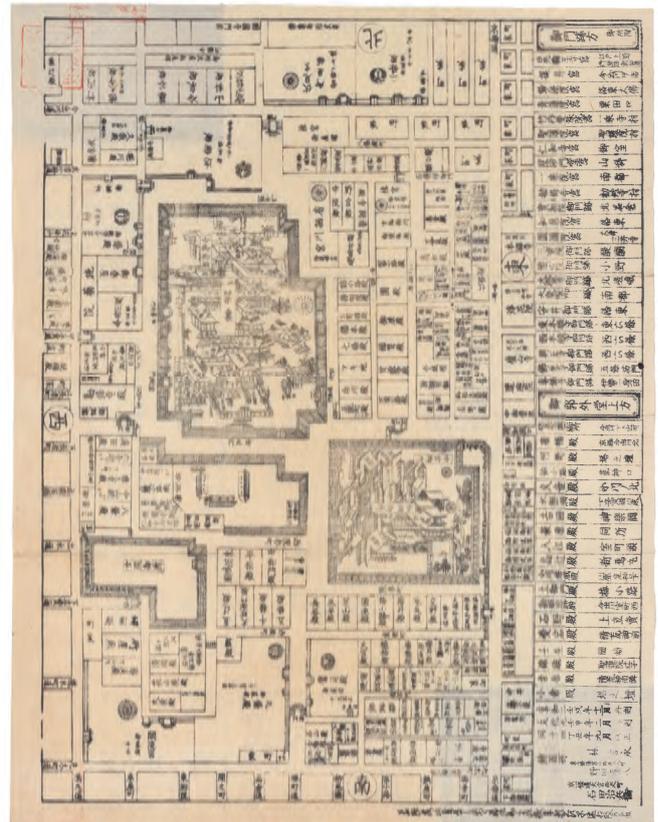
「京三条通麩屋町西北角／文叢堂竹原好兵衛」が刊行した多色刷の絵図。考証は「池田東籬亭」と記されている。伏見の町並を詳しく記すのが特徴。屋敷は、武家＝橙色、公家＝薄墨色、寺院＝薄桃色、神社＝濃桃色、町屋＝黄色、に色分けされている。岡山藩屋敷は「ビセンヤシキ」と記されている。



8 しんかいだいりず 新改内裏図

1枚 文化14年(1817)9月
T9-119 59.0 × 46.4 墨刷

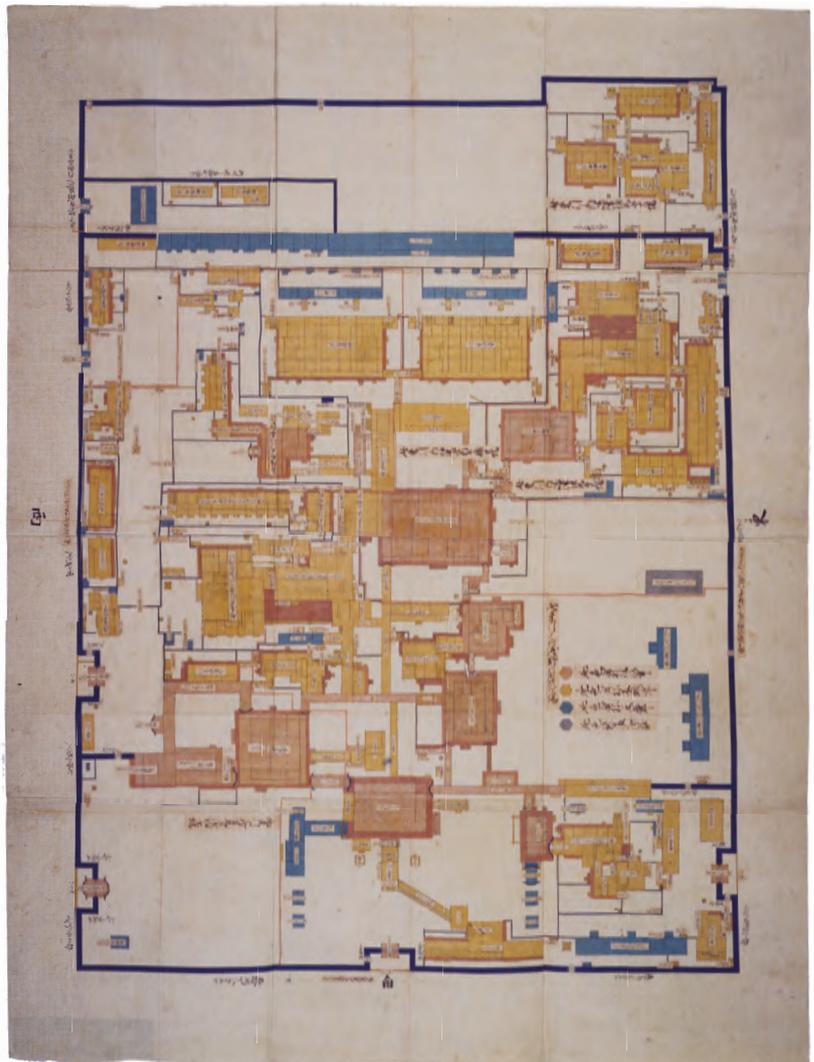
禁裏・仙洞御所を中心に、皇族や公家衆の屋敷の配置を示した図。林吉永の板を享和2年に京一条通大宮西江入町石田治兵衛他が再刻したものの改訂版。何度も版を重ねたようで、こうした絵図の需要がそれなりにあったことを示している。欄外に変更すべき箇所があれば知らせてくれるように頼んでいるのも興味深い。正確な情報提供が刊行図の命であった。



9 きんちゅうおんさしず 禁中御指図

1鋪 寛文4年(1664)8月
T7-9-1 111.5 × 83.8 袋入

「新院御所御指図」T7-9-2と一緒に袋に入れられており、袋には「故大御納戸」と記した貼紙がある。造営を担当したのは、「伊達宮内少輔」(伊予吉田藩)・「嶋津但馬守」(佐土原藩)・「浅野内匠頭」(赤穂藩)・「有馬左衛門佐」(延岡藩)で、それぞれの丁場が朱線で区切られている。建物は「屋柵桧皮葺」「屋柵木賊葺」「屋柵瓦葺」「修復之家」に色分けされている。岡山藩が延宝3年の造営にあたって参照したものであると思われる。参考2禁裏御指図と比べてみると多少の変更が加えられたことが分かる。



10 きんりさまおにわおんえずのうつし
禁裏様御庭御絵図之写

1枚 [延宝3年(1675)]
T7-11 108.3 × 91.6

禁裏御学問所前の庭の様子を描いた
図。包紙貼紙に「大納戸」とある。



11 きんりごてんのまならびにとのえもようのひかえおぼえがき
禁裏御殿之間并戸之画模様之扣覚書

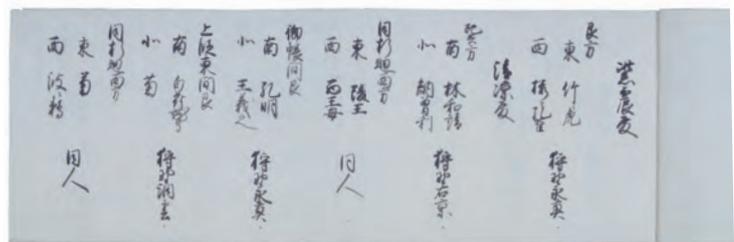
2冊 [延宝3年(1675)]
T7-12 包紙入



新築の禁裏御殿を飾る襖絵・障壁画の画
題と担当絵師の名前を書き上げた目録。
狩野派の絵師がずらりと並んでいる。包
紙貼紙に「大納戸」とある。

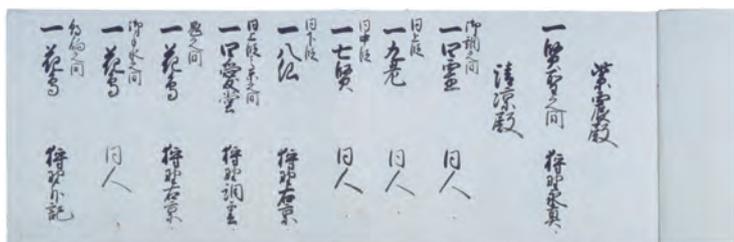
11-1 きんりごしんでんおんえつけもくろく
禁裏御新殿御絵付目録

1冊 T7-12-1 15.6 × 46.0



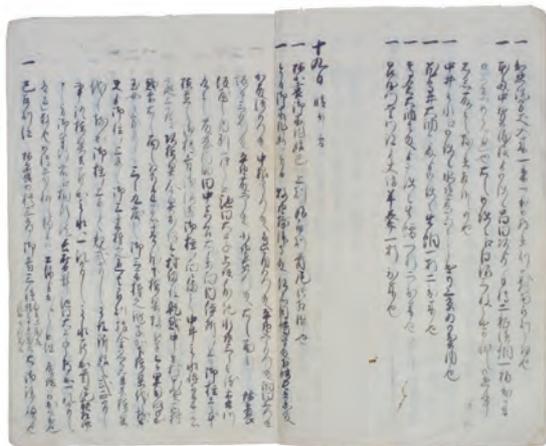
11-2 きんりごしんでんすぎとおんえようのもくろく
禁裏御新殿杉戸御絵様之目録

1冊 T7-12-2 15.6 × 46.0



12 きょうとにつちよう
京都日帳

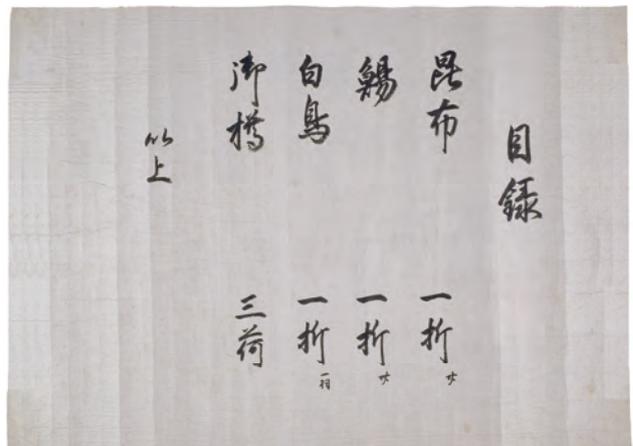
1冊 延宝3年(1675)
T7-15 28.1 × 19.4 袋入



袋上書に「延宝三年禁裏新院御普請京都之日記」とあり、貼紙に「大納戸」とある。延宝3年正月7日から同年極月30日まで、禁裏造営に関する出来事を日次に記した帳面。このなかの「諸奉行」書上のうちに「日帳 川西恒吉」とあるから、彼が記したものか。造営の全過程が詳しく分かる資料である。

13 もくろく
目録

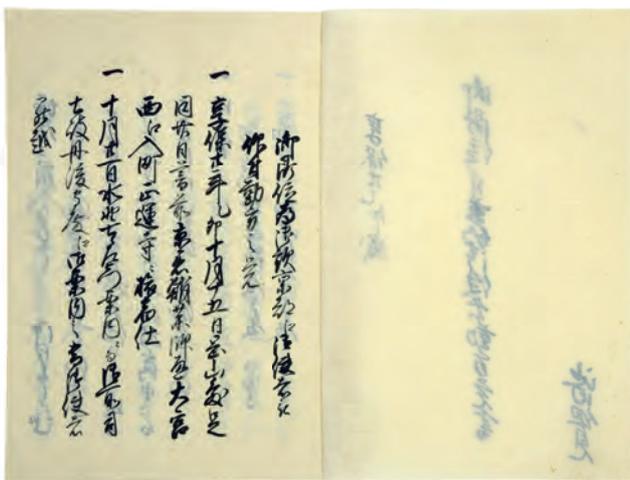
1通 延宝3年(1675)1月19日
T13-9 47.0 × 66.2 箱入・礼紙あり



禁裏造営の木作始に際して綱政が禁裏から拝領した祝儀の目録。三荷三種の丁重な祝儀である。「延宝三年乙卯正月十九日拝領御木作御賀御樽御肴御目録」と上書きした桐箱に入っている。この箱には、同年11月16日の「御上棟御祝儀御拝領之御目録」が一緒に納められている。箱蓋に「故大御納戸」と記した貼紙がある。

14 ごそくい つききょうとごしやつとめかたおぼえがき
御即位ニ付京都御使者勤方覚書

1冊 享保20年(1735)11月25日
C7-307 27.4 × 20.0 袋入



桜町天皇の即位にあたって池田但見が京都で使者を勤めたときの記録。10月15日に岡山発足、11月24日に岡山に帰着するまで。池田但見は享保8年(1723)6月から家老職。所司代はじめ世話になった武家・公家への礼儀も欠かせない役目であった。なお14～17の資料は、この時期の他の京都使者の記録と一緒に袋に入れられていた。

15 しょうしだい おわた そうろうかきつけ
所司代ヨリ御渡シ候書付

1通 [享保20年(1735)] C7-309-8 16.6 × 130.9 包紙入

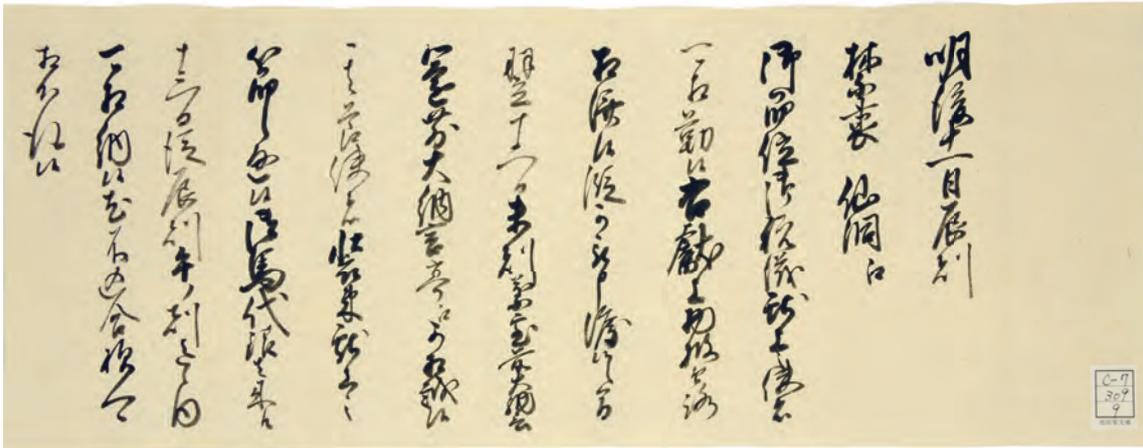


祝儀献上の場所や作法について指示した覚書。ただし、日限・時刻は後日知らせるとある。

II Source data description

16 ときたんごのかみどのごようになあいわたしそろうかきつけ
土岐丹後守殿御用人相渡候書付

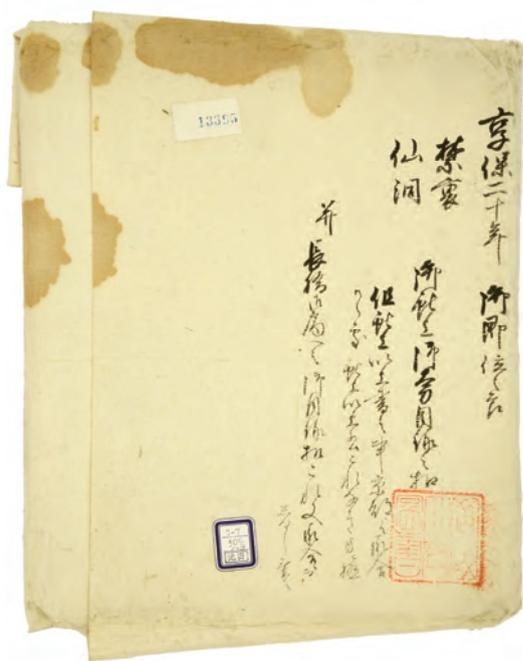
1通 [享保20年(1735)] 11月9日
C7-309-9 19.4 × 50.8 包紙入



即位祝儀の使者を明後11日に勤めるべきことなどを指示した書状。朝廷との交接は所司代の指示のもとに行われた。土岐丹後守頼稔は享保19年(1734)6月から寛保2年(1742)6月まで所司代を勤めている。

17 けんじょうもくろくのひかえ
献上目録之扣

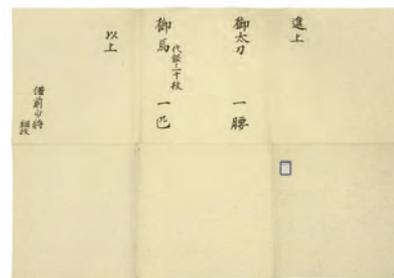
3通 [享保20年(1735)]
C7-309 包紙入



桜町天皇の即位にあたって池田綱政が献上した太刀などの目録。包紙上書に「享保二十年御即位之節禁裏・仙洞御献上御太刀目録之扣、但献上以上書之事京都にて承合候之處、献上以上書これなき方二極、并長橋御局之御目録扣これ又承合ニ而しるし置之」とある。

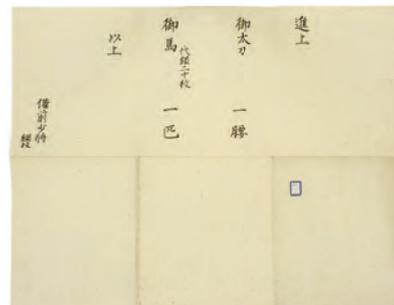
17-1 きんりぶん
〔禁裏分〕

1通 C7-309-1 46.3 × 66.1



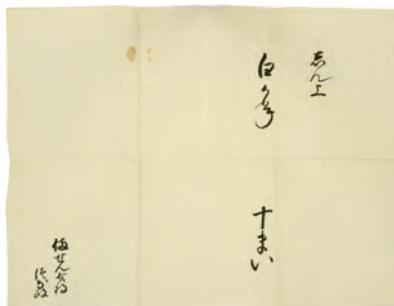
17-2 せんとうぶん
〔仙洞分〕

1通 C7-309-2 51.2 × 66.4



17-3 ちゅうぐうぶん
〔中宮分〕

1通 C7-309-3-2 51.8 × 66.7



18 わきさかあわじのかみあてろうじゅうれんしよじょううつし 脇坂淡路守宛老中連署状写

1通 嘉永7年(1854)2月15日
C4-85 40.2 × 54.2 包紙入

將軍から松平内蔵頭(池田慶政)の少将への昇任が仰せ付けられたので、その旨を伝奏衆へ伝えるように指示した老中奉書の写し。脇坂淡路守宛宅は、嘉永4年(1851)12月から安政4年(1857)8月まで京都所司代。連署した老中は、阿部伊勢守正弘・牧野備前守忠雅・松平和泉守乗全・松平伊賀守忠優・久世大和守広周・内藤紀伊守信親である。



19 せいめいがきひかえ 姓名書控

1通 嘉永7年(1854)2月15日
C4-71 44.8 × 63.2 包紙入

將軍が池田慶政の少将成を決定したことを示す文書の控え。老中奉書とともに京都所司代に提出された。



20 まつだいらくらのかみみなもとよしまさあそんしょうしょうなりごかんもつのごと 松平内蔵頭源慶政朝臣少将成御官物之事

1通 嘉永7年(1854)3月 C4-84 39.8 × 246.8 包紙入



坊城前大納言殿家山本将監・浅野主膳から池田外守にあてた書類。池田慶政から朝廷への祝儀の品々を受け取り、それぞれ差し上げたことを知らせている。禁裏へは太刀・白銀30枚などが献じられ、そのほか准后・新待賢門院・内侍所にもそれぞれ献上している。坊城前大納言俊明は弘化2年(1845)10月から嘉永7年(1854)6月まで武家伝奏を勤めた。池田外守は嘉永4年(1851)6月から文久2年(1862)9月まで番頭、このとき藩主名代として使者を勤めた。資料21・22より、日付は3月16日であったことが知れる。

21 まつだいらくらのかみあてわきさかあわじのかみしよじょう 松平内蔵頭宛脇坂淡路守書状

1通 嘉永7年(1854)3月16日
C4-80 39.0 × 52.0 包紙入

老中からの奉書にもとづき伝奏衆に申し達したところ、口宣などが調ったので、本日請取の使者を遣わすようにと指示した京都所司代の書状。



あいつとめそろうしゅびかきあげ
22 相勤候首尾書上

1通 [嘉永7年(1854)] 4月朔日 C4-87 19.8 × 235.6 包紙入



波多野吉之丞は知行300石、嘉永6年(1853)11月から安政4年(1857)11月まで使役。慶政少将成にあたっては、江戸から京都まで老中奉書などを届け、京都では藩主名代である池田外守に随って使者添役を勤めた。口宣などを賜った後は、それらを江戸屋敷に届けている。本資料は、以上の勤めぶりを波多野自身が藩に報告した文書。威儀を正すために、道中では連人13人、京都では18人が付けられた。京都での宿所は津国屋であった。

いよのかみあていちじょううしゅうふしよじょう
23 伊予守宛一条右相府書状

1通 [延宝7年(1679)] 8月20日
C6-406-1 32.6 × 49.5 包紙入



一条教輔が池田綱政にあてた書状。寺地などの望みはないので、大曼荼羅だけを返してほしいという妙覚寺の依頼を取り次いでいる。京都の寺社とのやりとりで公家衆が仲介する場面も少なくなかった。包紙貼紙に「御廟」と書入がある。

しちくおやしき おんえず
24 紫竹御屋敷ノ御絵図

1枚 年代未詳 T5-87 140.9 × 98.6 袋入

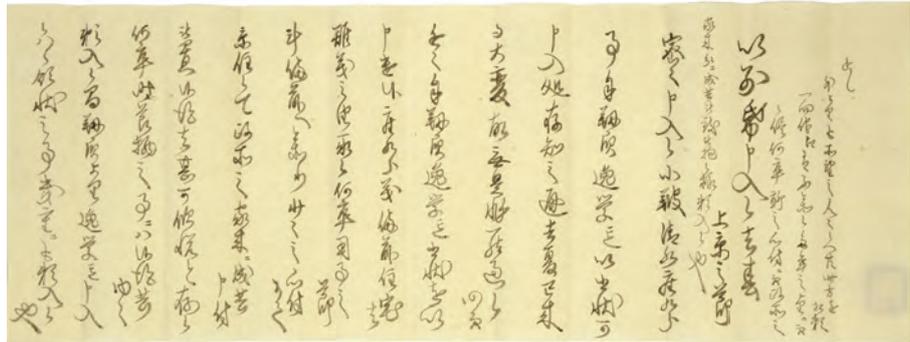
京都郊外紫竹にあった一条政所輝子の別邸を描いた絵図。周辺の景色を美しく描いている。鷹峯に「本阿弥光甫屋敷」の書込があり、光甫が亡くなる天和2年(1682)以前の絵図であると知れる。袋に「故御数寄方」と記した貼紙がある。



25 備前少将宛一条道香書状

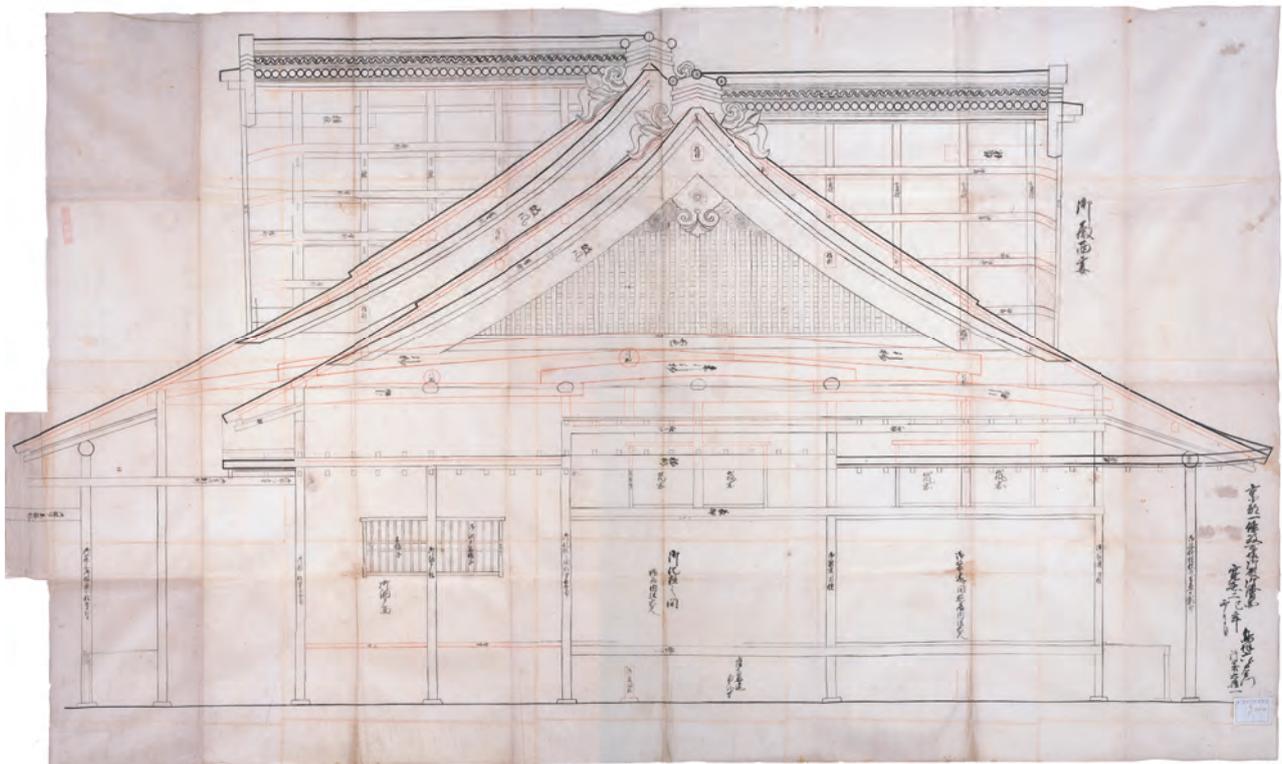
1通2枚 年未詳1月9日
C8-200 36.0 × 49.2、18.0 × 49.2 包紙入

本紙（上）は挨拶が中心で、用件は別紙（下）に書かれている。池田継政が小鞍清水庄九郎を召し抱える希望を道香に伝えたところ、本人が備前住宅は難しいので、京住のまま用事のときだけ備前に参るようにはどうか、そのため少々の心付をして政所の家来にでも申付けておいてはどうかと、道香が返事したものの。諸芸能にかかわる便宜を公家衆が果たしている様子が見える。



26 京都一条政所様御殿御絵図

1枚 寛延2年(1749)1月 T13-76 111.6 × 186.4



この年池田継政の養女となった静子が一条道香のもとに嫁しており、そのために政所御殿を修築したものか。鳥羽六郎右衛門は、この時期棟梁として岡山藩関係の建物をいくつか建造している。

II Source data description

つなまさこうけまりごめんじょうそのほかしなじな
27 綱政公蹴鞠御免状其外品々

5点 年代未詳
R5-95 箱入

表題は箱に貼られた
題簽による。



おうぎ
27-1 扇

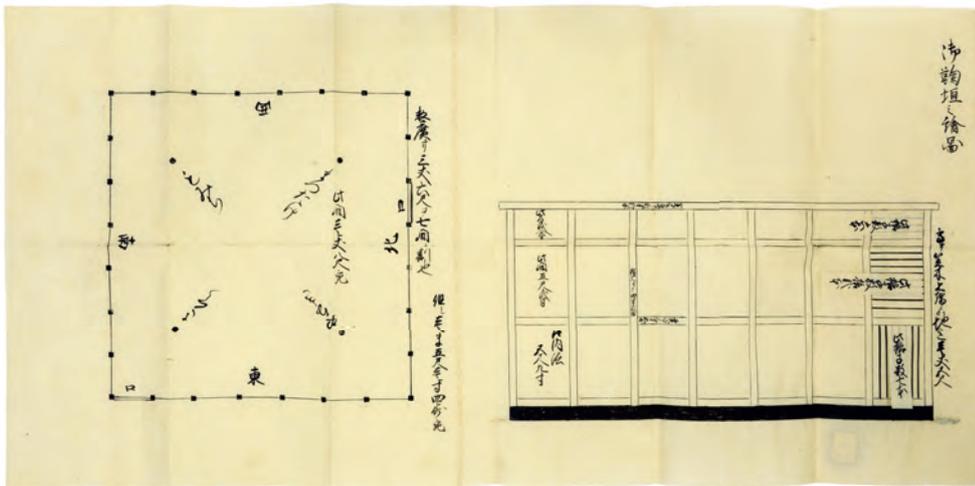
2本 年代未詳
R5-95-3 36.0 × 44.0 包紙入

蹴鞠で使用された扇。揚羽蝶の池田家家紋が施されている。「扇 三本」と記した包紙に3扇が包まれている。



おんまりがきのえず
27-2 御鞠垣之絵図

1枚 [正徳2年(1712)8月11日] R5-95-4 33.3 × 68.7 包紙入

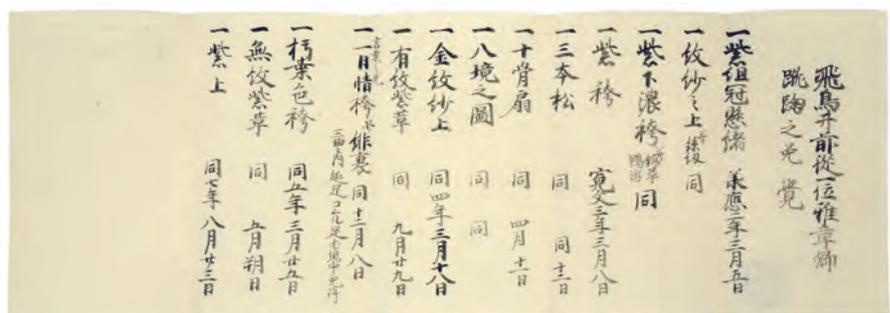


蹴鞠が行われる鞠垣の仕様を描いた図。包紙に「正徳二年壬辰八月十一日吉田安兵衛扣ヲ以調上ル」と記されている。

けまりめんじょうのしだい
27-3 蹴鞠免状之次第

1通 年代未詳 R5-95-5 17.5 × 49.8 帯封・包紙入

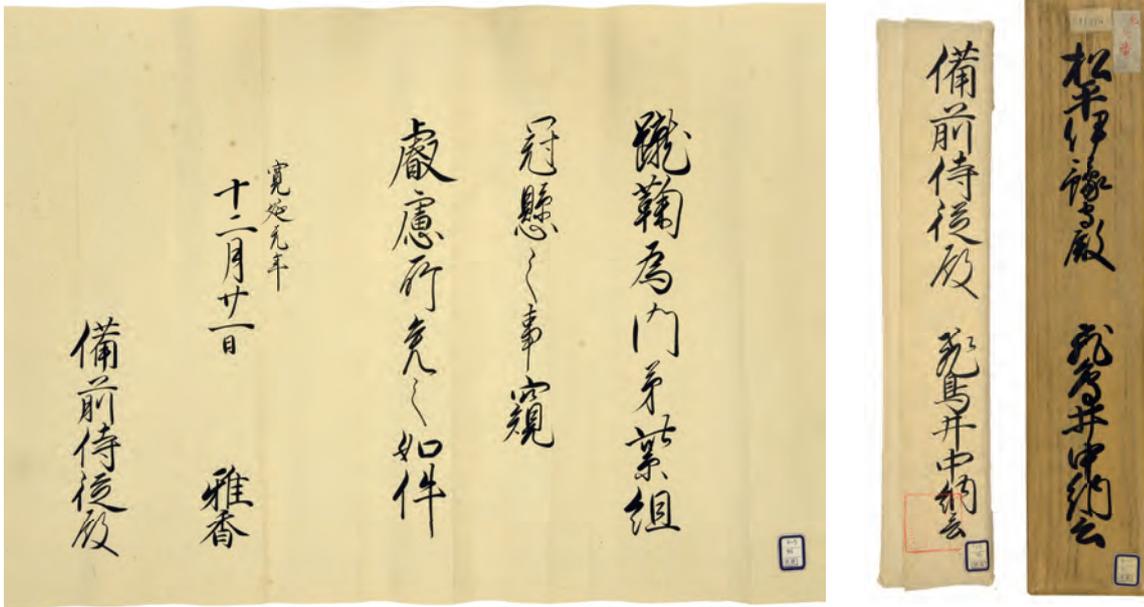
表題は包紙および帯封の上書きによる。本紙には「飛鳥井前従一位雅章卿蹴鞠之免覚」とある。承応2年(1653)の「紫組冠懸緒」から寛文7年(1667)の「紫上」までの免状の書上。藩主になる以前の綱政が熱心に蹴鞠を習得したことがうかがえる。包紙に「綱政公御筆」と記されている。



けまりめんきょじょう
28 蹴鞠免許状

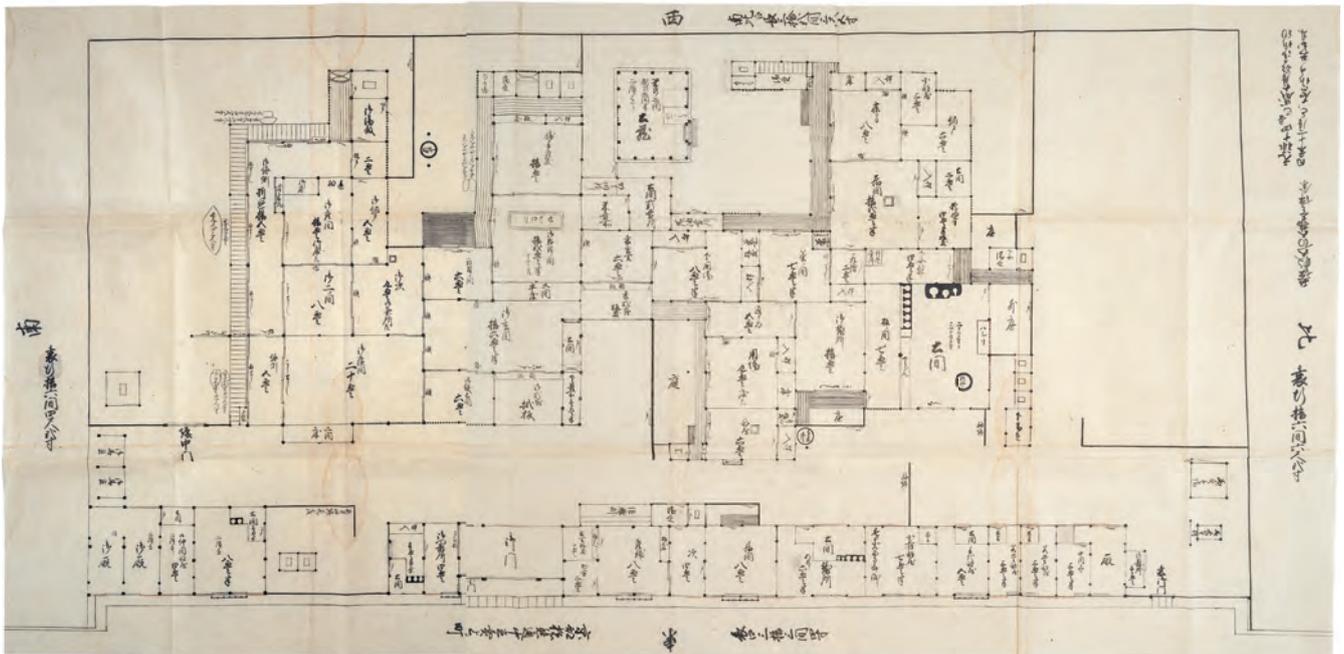
1通 寛延元年(1748)12月21日
R5-96 42.3 × 62.5 箱入・包紙入

包紙上書には「備前侍従殿(池田宗政) 飛鳥井中納言(雅香)」とある。蹴鞠における「紫組冠懸」を免許したものの「窺 叡慮」とあり、天皇の許可を得て免許するという形式を取っていることが分かる。このように権威付けられた公家の芸能を伝授されることを、大名衆は望んだのだろう。



きょうとしんおやしきそうえず
29 京都新御屋鋪惣絵図

1鋪 元禄14年(1701) T5-67 83.5 × 168.9 袋入

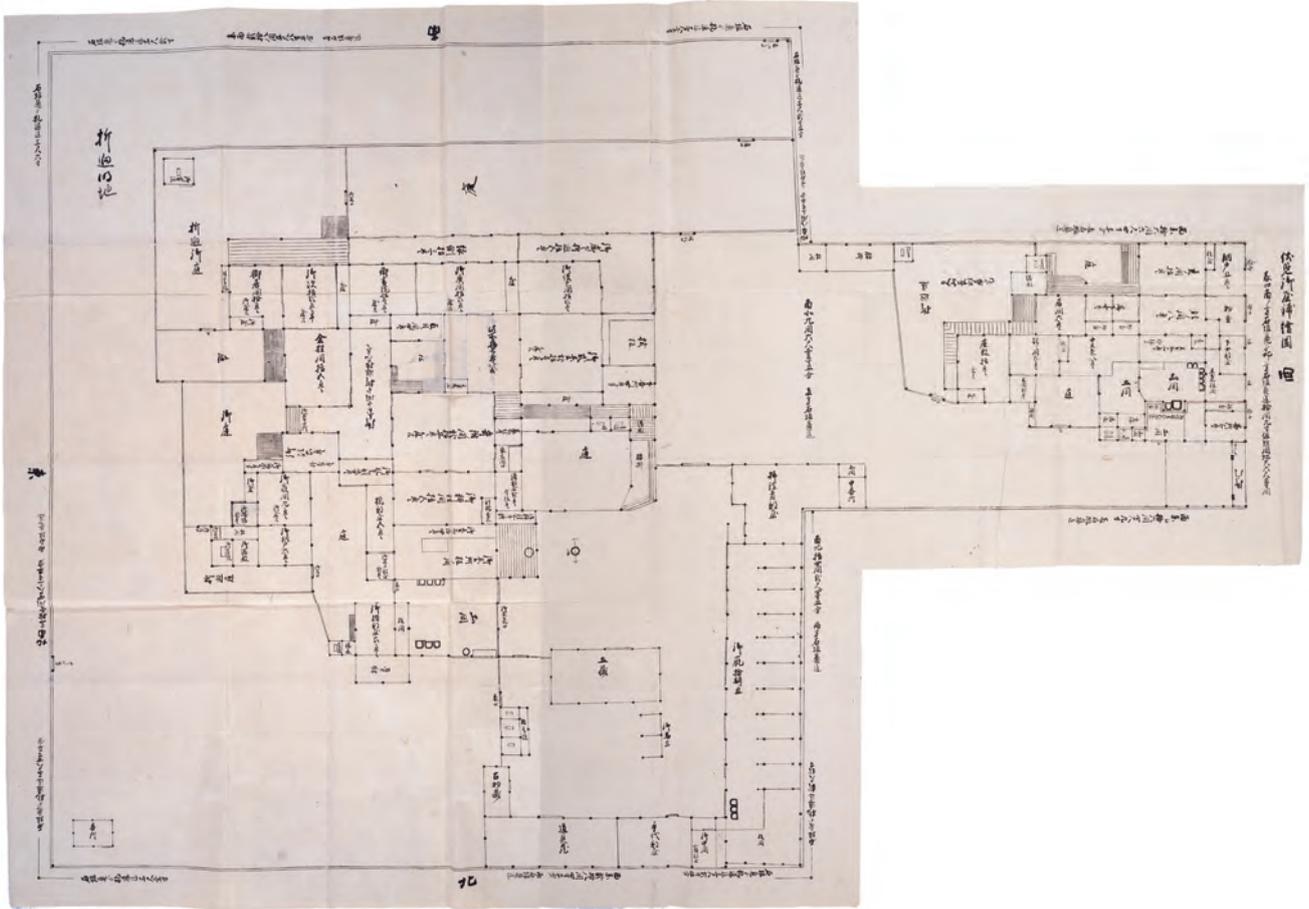


猪熊通中立売上ル町に新築された岡山藩京都屋敷の指図。「惣坪数五百五拾壹坪余」。欄外に「元禄十四辛巳歳五月朔日御新初、同年十一月迄ニ右御作事惣出来」と記されている。袋に「故大御納戸」の貼紙がある。

II Source data description

30 ふしみおやしきえず
伏見御屋鋪絵図

1 鋪 元禄 13 年 (1700) 3 月
T5-68 121.7 × 173.8 袋入



年紀は袋の上書による。同じく袋に「久山長助」の名が記されている。久山長介は、元禄 10 年 (1697) 8 月に大坂定目付から伏見在番に転じ、同 14 年 7 月まで同役を勤めた。

31 しょしきこうたい
諸職交代

2 冊 年代未詳 F1-7 13.0 × 19.8 畳紙入

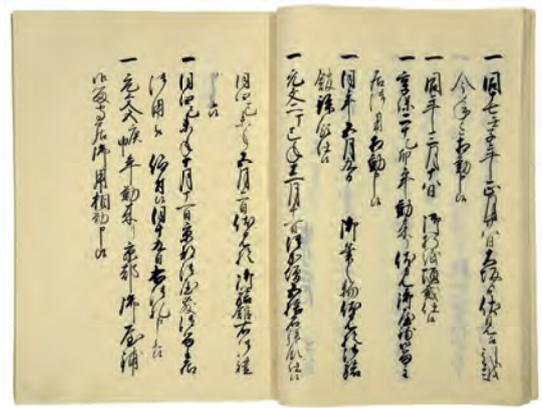


慶長期から明治期まで家老をはじめとした諸役人の交替を記録したもの。京都留守居には、延宝 4 年 (1676) 就任の若林弥三郎から沢井宇右衛門まで 28 人が、伏見在番には延宝元年 (1673) の梶田喜八郎から沢井宇右衛門まで 22 人が、それぞれ列挙されている。本図録 5 頁の表はこれから作成した。

いわいげんじろうほうこうがき
32 岩井源次郎奉公書

1冊 年代未詳 D3-271 28.0 × 20.5

岩井源次郎家歴代の勤務履歴を記録したもの。池田家文庫には藩士3423家分の「奉公書」が残っている。同家の岩井善内は、享保11年(1726)4月～同16年8月大坂定目付、同年同月～元文4年(1739)10月伏見在番を経て、同年同月～京都留守居となっている。寛延元年(1748)5月政所様(一条静子)附を命じられ、宝暦5年(1755)5月に帰役、同7年10月に隠居するまで京都留守居を勤めた。この間に知行も150石から230石に加増されている。善内隠居後は、息子の空之丞が同年同月から安永9年(1780)11月まで京都留守居を継ぎ、さらに同年同月から寛政4年(1792)10月までは孫の源次郎が京都留守居を勤めた。3代続けて京都留守居を勤めたのは稀有な例である。



さんかみがたおんげちじょうどめ
33 三上方御下知状留

5冊 天保9年(1838)～嘉永2年(1849)
A1-633～637 26.8 × 21.0

江戸から三上方(京都・大坂・伏見)の留守居・在番にあてた下知状(指示書)を留めた記録。天保9年(1838)から嘉永2年(1849)までの5冊分が残されている。(一)の表紙には「近年之分」、(三)には「読合相済」、(五)には「考例済」の貼紙がそれぞれ貼られている。幕末に向かって、上方での活動の重要性が高まっていることを示すだろう。



(一)



(二) (三) (四) (五)

からくさいけんず
34 花洛細見図

15帖 元禄17年(1704)正月
T9-118 17.1 × 26.8 箱入・墨刷・折本

表紙題簽は「宝永花洛細見図」。京都の年中行事や名所旧跡を紹介する絵本。「序」によれば、寺町通二条下ル二町目洛陽絵本所金屋平右衛門が刊行した。箱蓋に「故御数寄方」と記した貼紙があり、藩主近くで愛用されたものと思われる。



II Source data description

からくさいけんず
「花洛細見図」首一 火焼

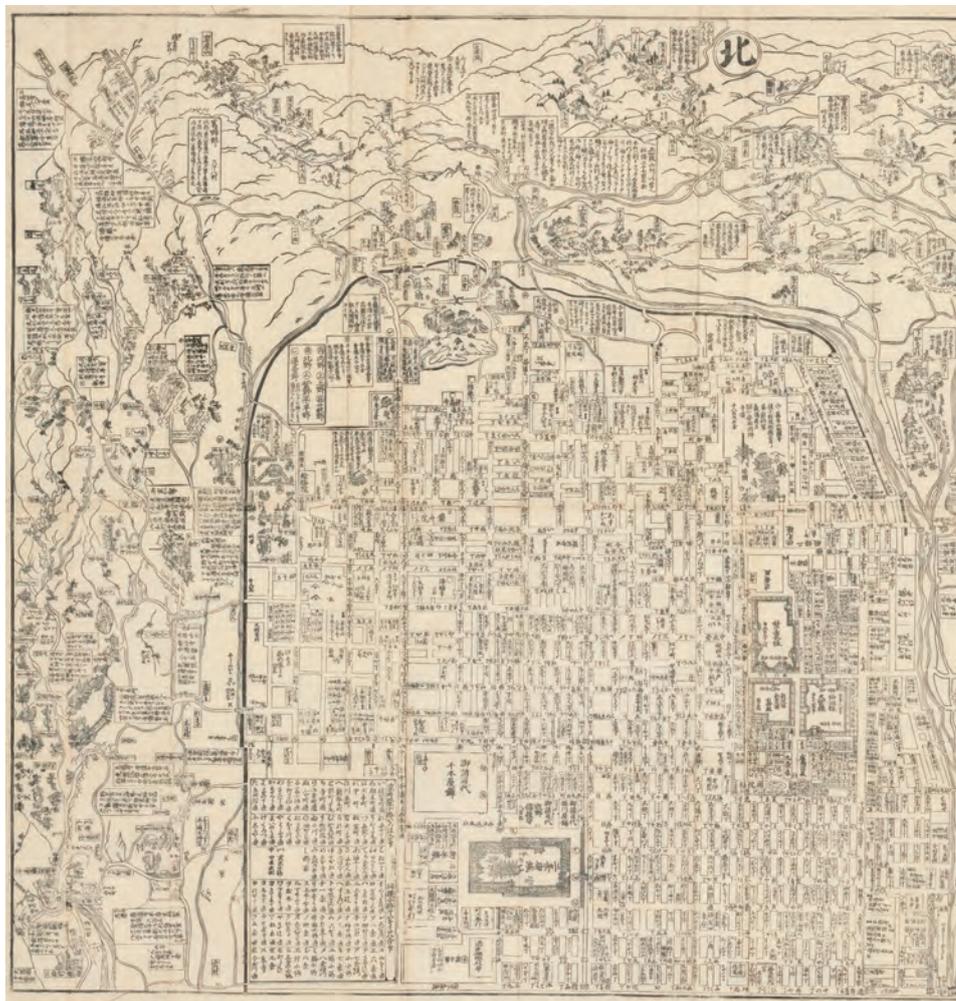
お火焼（ひたき）は陰暦11月8日に行なわれた祭事。庭に清火をたいて、歌や踊で火をまつた。火事除けの行事として宮中や神社でも行なわれた。



参考1 ぞうほさいはんきょうおおえず けん きたやま みなみさんじょうまで
増補再板京大絵図（乾）北山ヨリ南三条迄（複製・部分）

1 鋪 寛保元年（1741）11月 T9-123 91.0 × 124.0 墨刷

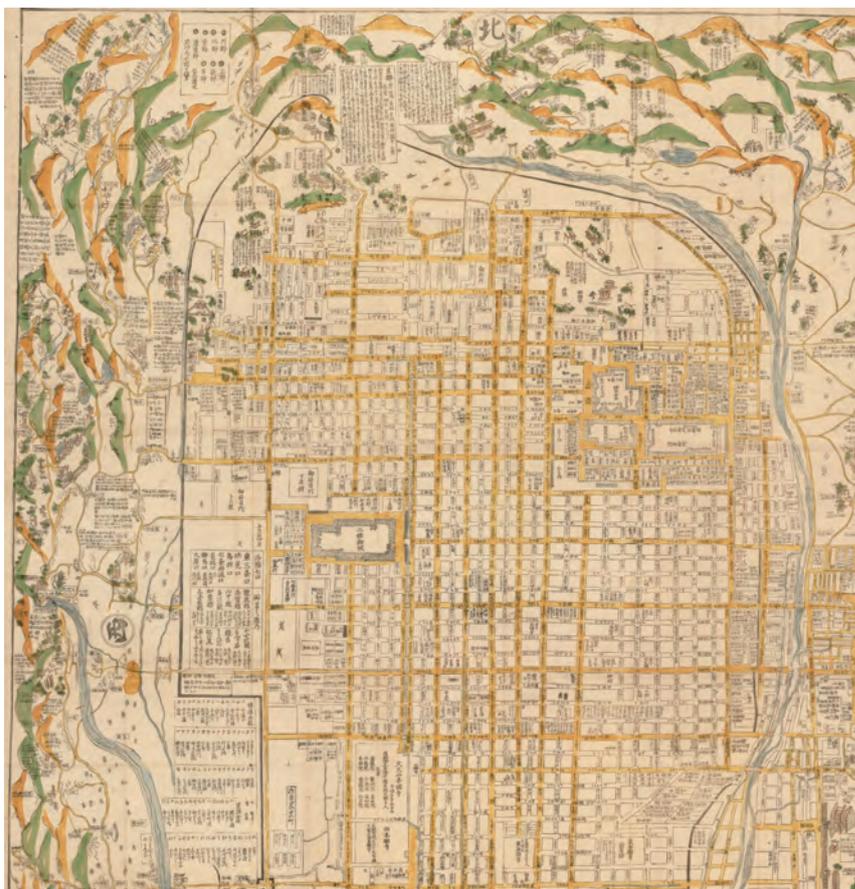
（坤）北三条ヨリ南伏見迄 T9-124 とあわせて京都を示す大判の刊行図。「京寺町通二条上ル町御絵図所林氏吉永」が刊行。有名な寺社には由緒などが記され、名所案内を兼ねた内容になっている。表紙に「故学校」と記した貼紙がある。「松平いよ」の京屋敷もみえる。



参考 2

しんせんぞうほきょうおおえず 新撰増補京大絵図 (複製・部分)

1 鋪 年代未詳
T9-125 164.6 × 124.4 墨刷手彩色

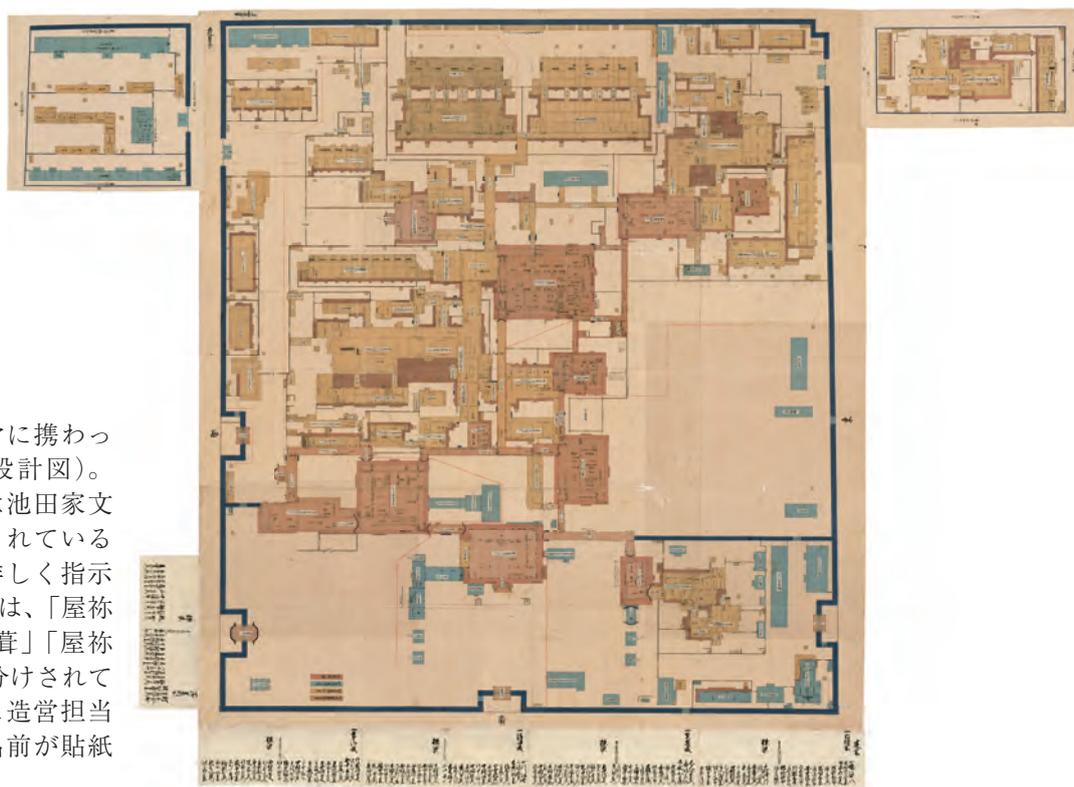


「京寺町通二条上ル町御絵図所林氏吉永」が刊行した絵図。墨刷に丁寧な手彩色が施されている。所司代として水野和泉守の名がある。彼が所司代であったのは正徳4年(1714)9月～享保2年(1717)9月だから、この時期に刊行されたものと思われる。

参考 3

きんりおんさしず 禁裏御指図 (複製)

1 鋪 [延宝3年(1675)]
T7-10 173.2 × 237.2



岡山藩が禁裏造営に携わったときの指図(設計図)。このときの指図は池田家文庫にいくつか残されているが、これが最も詳しく指示されている。建物は、「屋柵 桧皮葺」「屋柵 板葺」「屋柵 瓦葺」「縁」に色分けされている。建物ごとに造営担当の役人と棟梁の名前が貼紙に記されている。

番号	資料名	員数	年代	法量(hxw,cm)	整理番号	備考
1	山城国絵図	1 鋪	未詳	164.5×116.8	T1-80	
2	横井養玄宛池田利隆書状	1 通	〔慶長20年(1615)〕閏6月9日	36.0×54.0	C9-31	
3	池田光政宛徳川家光一字書出状	1 通	元和9年(1623)8月3日	46.3×66.6	C6-317	包紙入
4	池田光政宛権大納言局書状	1 通	未詳	43.1×58.8	C9-37	包紙入
5	新板平安城并洛外之図	1 鋪	天和2年(1682)3月	93.2×59.4	T9-127	墨刷手彩色
6	政所様ヨリ来ル京之図	1 枚	宝永6年(1709)11月24日	47.6×33.2	T9-120-2	墨刷・朱線
7	改正京町絵図細見大成	1 鋪	天保2年(1831)7月	178.7×146.3	T9-128	多色刷
8	新改内裏図	1 枚	文化14年(1817)9月	59.0×46.4	T9-119	墨刷
9	禁中御指図	1 鋪	寛文4年(1664)8月	111.5×83.8	T7-9-1	袋入
10	禁裏様御庭御絵図之写	1 枚	〔延宝3年(1675)〕	108.3×91.6	T7-11	
11	禁裏御殿之間并戸之画模様之扣覚書	2 冊	〔延宝3年(1675)〕		T7-12	包紙入
11-1	禁裏御新殿御絵付目録	1 冊		15.6×46.0	T7-12-1	
11-2	禁裏御新殿杉戸御絵様之目録	1 冊		15.6×46.0	T7-12-2	
12	京都日帳	1 冊	延宝3年(1675)	28.1×19.4	T7-15	袋入
13	目録	1 通	延宝3年(1675)1月19日	47.0×66.2	T13-9	箱入・礼紙あり
14	御即位ニ付京都御使者勤方覚書	1 冊	享保20年(1735)11月25日	27.4×20.0	C7-307	袋入
15	所司代ヨリ御渡シ候書付	1 通	〔享保20年(1735)〕	16.6×130.9	C7-309-8	包紙入
16	土岐丹後守殿御用人相渡候書付	1 通	〔享保20年(1735)〕11月9日	19.4×50.8	C7-309-9	包紙入
17	献上目録之扣	3 通	〔享保20年(1735)〕		C7-309	包紙入
17-1	〔禁裏分〕	1 通		46.3×66.1	C7-309-1	
17-2	〔仙洞分〕	1 通		51.2×66.4	C7-309-2	
17-3	〔中宮分〕	1 通		51.8×66.7	C7-309-3-2	
18	脇坂淡路守宛老中連書状写	1 通	嘉永7年(1854)2月15日	40.2×54.2	C4-85	包紙入
19	姓名書控	1 通	嘉永7年(1854)2月15日	44.8×63.2	C4-71	包紙入
20	松平内蔵頭源慶政朝臣少将成御官物之事	1 通	嘉永7年(1854)3月	39.8×246.8	C4-84	包紙入
21	松平内蔵頭宛脇坂淡路守書状	1 通	嘉永7年(1854)3月16日	39.0×52.0	C4-80	包紙入
22	相勤候首尾書上	1 通	〔嘉永7年(1854)〕4月朔日	19.8×235.6	C4-87	包紙入
23	伊予守宛一条右相府書状	1 通	〔延宝7年(1679)〕8月20日	32.6×49.5	C6-406-1	包紙入
24	紫竹御屋敷ノ御絵図	1 枚	未詳	140.9×98.6	T5-87	袋入
25	備前少将宛一条道香書状	1 通 2 枚	年未詳 1月9日	36.0×49.2、 18.0×49.2	C8-200	包紙入
26	京都一条政所様御殿御絵図	1 枚	寛延2年(1749)1月	111.6×186.4	T13-76	
27	綱政公蹴鞠御免状其外品々	5 点	未詳		R5-95	箱入
27-1	扇	2 本	未詳	36.0×44.0	R5-95-3	包紙入
27-2	御鞠垣之絵図	1 枚	〔正徳2年(1712)8月11日〕	33.3×68.7	R5-95-4	包紙入
27-3	蹴鞠免状之次第	1 通	未詳	17.5×49.8	R5-95-5	帯封・包紙入
28	蹴鞠免許状	1 通	寛延元年(1748)12月21日	42.3×62.5	R5-96	箱入・包紙入
29	京都新御屋鋪惣絵図	1 鋪	元禄14年(1701)	83.5×168.9	T5-67	袋入
30	伏見御屋鋪絵図	1 鋪	元禄13年(1700)3月	121.7×173.8	T5-68	袋入
31	諸職交代	2 冊	未詳	13.0×19.8	F1-7	
32	岩井源次郎奉公書	1 冊	未詳	28.0×20.5	D3-271	
33	三上方御下知状留	5 冊	天保9年(1838) ～嘉永2年(1849)	26.8×21.0	A1-633 ～637	
34	花洛細見図	15 帖	元禄17年(1704)正月	17.1×26.8	T9-118	箱入・墨刷・折本
参考1	増補再板京大絵図(乾) 北山ヨリ南三条迄(複製・部分)	1 鋪	寛保元年(1741)11月	91.0×124.0	T9-123	墨刷
参考2	新撰増補京大絵図(複製・部分)	1 鋪	未詳	164.6×124.4	T9-125	墨刷手彩色
参考3	禁裏御指図(複製)	1 鋪	〔延宝3年(1675)〕	173.2×237.2	T7-10	

池田家文庫絵図展

年度	展示テーマ	会 期	会 場
平成9	絵図にみる岡山城	1997年10月24日～11月2日	岡山大学附属図書館
平成10	岡山藩と海の道	1998年10月23日～11月1日	岡山大学附属図書館
平成11	後楽園と岡山藩	1999年10月23日～11月1日	岡山大学附属図書館
平成12	備前慶長国絵図のふしぎ	2000年10月23日～11月1日	岡山大学附属図書館
平成13	岡山藩江戸藩邸ものがたり	2001年10月23日～11月1日	岡山大学附属図書館
平成14	開けゆく岡山平野 岡山藩の新田開発 (1)	2002年10月23日～11月1日	岡山大学附属図書館
平成15	新田開発をめぐる争い 岡山藩の新田開発 (2)	2003年10月23日～11月1日	岡山大学附属図書館
平成16	岡山城下町をあるく	2004年10月23日～11月1日	岡山大学附属図書館
平成17	江戸時代の岡山 池田家文庫絵図名品展	2005年9月29日～10月10日	岡山市デジタルミュージアム
平成18	戦さと城	2006年10月26日～11月12日	岡山市デジタルミュージアム
平成19	陸の道	2007年11月16日～12月2日	岡山市デジタルミュージアム
平成20	日本と「異国」	2008年11月1日～11月16日	岡山市デジタルミュージアム
平成21	岡山藩の教育	2009年9月29日～10月18日	岡山市デジタルミュージアム
平成22	絵図にみる中国四国地方の城下町	2010年11月16日～11月28日	岡山市デジタルミュージアム
平成23	江戸時代の巨大手描き絵図	2011年10月22日～11月6日	岡山市デジタルミュージアム
平成24	日本六十余州図の世界	2012年11月10日～11月25日	岡山シティミュージアム
平成25	開国と岡山藩	2013年11月4日～11月17日	岡山シティミュージアム
平成26	岡山藩と明治維新	2014年11月1日～11月16日	岡山シティミュージアム
平成27	京都と岡山藩	2015年10月24日～11月8日	岡山シティミュージアム

記念講演会・パネルディスカッション

年度	記念講演会	記念講演会講師 (役職は当時)	期 日
平成9	絵図を読む	岡山大学文学部教授 倉地克直	1997年10月25日
平成10	瀬戸内の交流	岡山県総合文化センター総括学芸員 竹林榮一	1998年10月23日
平成11	日本庭園と後楽園	岡山大学農学部教授 千葉喬三	1999年10月23日
平成12	江戸幕府の国絵図事業	東亜大学教授 川村博忠	2000年10月28日
平成13	岡山藩の江戸藩邸	東京大学史料編纂所教授 宮崎勝美	2001年10月23日
平成14	津田永忠と岡山藩の土木事業	岡山大学環境理工学部教授 名合宏之	2002年10月26日
平成15	近世の境界論争と裁判	東京大学史料編纂所助教授 杉本史子	2003年10月23日
平成16	岡山城下町を掘る ～絵図と遺構～	岡山市デジタルミュージアム開設事務所 乗岡実	2004年10月23日
平成17	池田家文庫絵図の見方	岡山大学文学部教授 倉地克直	2005年10月1日
平成18	「長久手合戦図屏風」の世界	茨城大学人文学部教授 高橋修	2006年10月26日
平成19	江戸時代の陸上交通	岡山県立記録資料館館長 在間宣久	2007年11月23日
平成20	「鎖国」の中の日本と朝鮮	名古屋大学文学部教授 池内敏	2008年11月1日
平成21	儒教教育と武士の人間形成	京都大学教育学研究科教授 辻本雅史	2009年10月3日
平成22	デジタルマップで廻る城下町	徳島大学大学院ソシオ・アーツ・サイエンス研究部教授 平井松午	2010年11月20日
平成23	国絵図復元の成果	東京藝術大学大学院准教授 荒井経	2011年10月23日
平成24	徳川家光と日本	京都大学名誉教授 藤井譲治	2012年11月18日
平成25	開国と開港	東京大学史料編纂所教授 横山伊徳	2013年11月9日
平成26	幕末維新期の岡山	東京大学名誉教授 宮地正人	2014年11月8日
平成27	近世京都の大名屋敷	京都大学大学院文学研究科教授 横田冬彦	2015年10月31日

年度	パネルディスカッション	パネラー・司会	期日
平成23	国絵図復活	東京大学史料編纂所教授 杉本史子 東京藝術大学大学院准教授 荒井経 電気通信大学准教授 佐藤賢一 筑波大学大学院博士前期課程 中村裕美子 国絵図研究会会員 青木充子 [司会] 東京大学大学院准教授 中村雄祐	2011年11月23日

平成 27 年度企画展 池田家文庫絵図展 京都と岡山藩

発行日／平成 27 年 10 月 24 日

主 催／岡山大学附属図書館 岡山シティミュージアム

発 行／岡山大学附属図書館

〒700-8530 岡山市北区津島中三丁目 1-1

印 刷／株式会社プリント・ケイ